

*ルカ福音書の時代

ルカの福音書がまとめられたのは、紀元後 60 年前後だと考えられる。キリストの十字架と死、復活から 30 年ほど経っている。イエス・キリストとは、何者なのか、本当にイエス・キリストは来たのか、生きて居たのか、という疑念を持つ人が多くなっていた。

*主のシモンへの語りかけ

5 章では、群衆がイエス様に押し迫るようにやって来て神のみことばを聞いた。それは、人々がイエス様の教えに驚いて関心を持っていたから。彼らは神のみことばに飢え渴いた。しかし、そこにいた漁師たちは網を繕う仕事をしていた。恐らくイエスの話声は聞こえていたはずだが、真剣に聴こうとしていなかった。そんな時、イエス様は、漁師のシモンに「舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように」命じる。

5 節「すると、シモンが答えた。『先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみしましょう。』」

シモンは、イエスを、「先生」と呼んだ。偉い人だとは認めている。そして、一晩中、漁をしたけれど、何一つとれないことを認めた。自分の得意とするところで、何もできなかった。自分の限界を知らされた。

主なる神様は、新しいことを成そうとするときは、まず私たちに自分の限界を悟らせる。自分の生き方に行き詰まるように導く。そんな時に、主は「ことば」をかけてくださる。そして、私たちが御ことばに従うように促される。父なる神様、イエス様、聖霊なる神様との関係、結びつきが何よりも大切であることに気付かせる。イエス様は大漁にした。

8 節「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。『主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。』」シモンはここで「ペテロ」と呼ばれている。ペテロはイエスによって付けられた名前である。この時から、自分で生きるのではなく、イエス様によって生きようになる。それで、ペテロはひれ伏して「先生」ではなく初めて「主よ」と呼んだ。今度はすべてをイエスに委ねるようになる。そして、彼は自分の罪深さに気づき、本当の意味で主イエス様に会った。神が新しいことを私たちのうちで行われるとき、私たちは、自分の罪深さ、弱さを本当の意味で知るようになる。

10 節後半「イエスはシモンに言われた。『恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。』」

イエスはシモンを慰めた。そして、今までとは違う歩みがはじまる。

*隣り人を活かす証し人へ

クリスチャン生活は、今までの生活の延長線上にはない。全く新しい生き方であり、主イエスを見つめながら古い人から解放され続ける歩みである。これから後、ペテロは人を活かす働きに加えられる。

11 節「彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。」

漁師たちは自ら進んで従った。それは、イエスがどのような方なのかを理解し、自分たちの限界を知り、イエスから約束をいただいたからだ。

私たちも、主イエス様に全き信頼をおいて、隣り人を活かす働き人、証し人を目指そう。